刀筆青砥石文

五

へ13
3573
5

門へ13
號3573
卷5

稲田大學図書館
昭34.6.3 購入
藏書

刀筆書 砥石文鷺水箴語巻之四

江隱 曲亭主人筆削
洛客 櫟亭琴魚原稿

第七套 歸京の音耗 假梁の水聲

賢女の賢者ゑ帰や。こゝを良縁とゝ。佳人の才子ゑ適や。これを奇耦とゝ。淫婦の奸夫ゑ遇ふや。こゝを野合とゝ。賢女と賢者と佳人と才子と尤偶ぐゝとゝ。その類少きの故ゝ。淫婦と奸夫と最狎易ーとゝ。同氣相求るの故ゝ。賢妻ゑ〻ば樂て淫ゼば。その良人不肖者ゑ〻ば。その負ゝれと見て悅ばゞ。淫婦ハ笑とりて人を迎ハ淫ゑ〻ぐれば樂ゑ〻。江湖億万の人色を好ゝ淫を貪ざるゝの稀ゝ。ゝ。ゝ。淫婦ハ数ま

つちや

富。賢女ハ一夫よ〻ゑ。造化の手より水漏て。ことゝの不細工奚ぞ妻さゞ。國を傾け。家を
覆すもの。十ゞて八九ハこれ。知ゞ。ゞて。溺るゝものハ愚こ。知りつ。若ゞざるものハ迷ひこ。只
聖賢のこゝ。ゝ紙よりくゝ。大約淫を貪んと欲するものハ。衣裳結髪動静云彦用心きく
偽飾て。女子の悦を迎るのこ。且婦人の情ハ巧言令色あゞざれば賢とせゞ。こゝ。ゝ。浮
薄便佞の艶冶郎ハ一夫ゞて數妻よ富り。偽二郎阿磔ホいハ。さゝく湯治劇齋亦その
人こ。彼をんて疎むものハ此をゝて親んゞ。人の態見てゞ態直せとゝの格言を忘るゝものハ彼
山鶏のゝ。ものゝ。ゝよ惚て。ものゝ。ゝよ溺るゝ類なるべ。再説草樂偽二郎ハ膳大くも留守の家を。
ものゝ。ゝくゝは踏荒て。阿磔と樂を取る程よけゝとゝ。翌と明て光陰の過るを覚ゞ秋も
ゞ。九月の後の月ゝるゝろよりつけゝも亦阿磔と共よ酒うち喫てゝる程よ外よゝ。

呼門のあり。駐立出て由を問ハ。その人答て。ものゝ。ゝハ六波羅殿の下の守屋なるものゝ。
西國より劇齋老の信あり。この書状届るゝ。如此傳へてよとゞくりよ状を遞与て
走去り。駐ハゞ。劇齋の劇の字を聞しより。忽地よ胸うち騒ぎ。遽く奥へ
いゝて云云と告るゝよんん。阿磔ハ書状を手よ取るゝ。偽二郎と目をあハて。俱よ嘆息
ゝる外なし。且くして阿磔がいゝ。主人の西へ赴ゞ。ハ六月の下澣なりゝ。假洛なゞく今ハ
ゞゞ。七八十ゝよりねゝ。ハ帰京の報なりとゝ。あゝよあくねどゝん。ゝと俱よ月日を送
ゝハ。このハけゝゝゝ。ゝ。ゝ程もあゞるべ。こゝいゝゝん。とゝ。歎けハ。偽二郎ゝゝと
慰めゝ。ゝハ豫ゝり期ゝゝるものゝ。先その状をんゝゝて封箱を折ゝ。共侶よゝゝを
見るゝ。初ハ里子の安否を訊。ゞ。恙ゝゝゝを写ゝ。ゝその次の條よゝ。七月某の日ゝれ

太宰府に参着して探題の尊恙を拝診し躬て湯剤を調進せしに三日にして效験
あり五日にして浮腫過半痩退き七日にして水氣全くなし二七夜にして元氣本復
なひ三七日にして氣力快然として生平より健になせ給へり。これその功を奏せる
その速なるをきん欽びのあまり過分の俸禄をもて鎮西の醫官にせらるべしと懇に
仰下されしかども固く辞奉るにそのまゝ許されずなりぬ。留させ給ひつゝ毎日の饗饍に
日を弥りてやうやく身の暇をたまはり禄物数引まさうようて明暁発足もかゝれば
後の月見の比へ必帰京もとべきにさそる侯不楽しくて徒然に堪ざりけん今雲時の
程なれバ日を僂て俟なん。すべて鴻便をもて案内もめでたしくかしくとぞ書より
ける。阿礫ハ書状を巻も返さで引束ね推揖りて腹たゝしげに揆地と投捨徒然なふん

日を僂て待と書きてし跡しきよそもつらふせんとぞあられ。袖もて涙を推拭へば傳二郎
且く沈吟していけるハ九月十三日その状の趣でハ帰京ハけふか翌なるらん虚々としてとまよ居
かし。さまいつる歎きのひそまれいあ北蓮華院にとめて寄宿せし夕観音
籤を折かる。吉凶を問奉りしに第三籤を取得ようがかくてその灵籤の詩ハ蔽衣
云云といふ絶句なりし後に考合されバとぶ衣を破られても身によろしべき祥なりし。
いかんや又その結句に臨水云云なり。遭砥云云と水も漏さで石よりも堅き契りを
示させ給へし加旃鞘を包みし紙にも灵歌題まりすれバ今こそ雲時別るゝも後を
いへバ歎くに足らず。又この暁さまされいと奇しき夢をこそみ譬バ彼鎌倉なる
鐵観音堂なりし身とられと臥るまにそんまバ彼首観音の面影へよくられに肖て

俗髪くしけと怪しとする程に。彼崩れさる佛の軀おのづから聚りつ。その首顔も赤おのづから。軀に著て忽地に五體具足の為体。一個の男子と顕れさる。形は消て水になりぬ。見てこの事を知べども。ありひろ移つ快かるべ。今又思へば亦夢あおぐさるべ。首と軀と離れ〻佛像。その面影のこれは肖て。五體全くありあひ。今の別をかなしめども。後そまでも情縁竭じ。夫となり婦となる。ち人牙とられしの前象あらん。後に消て水になりは。今の煩悩をかた流し。欲びを迎る祥欲ち人牙いくどひのふと問れさく要時頭を傾げいと淡そ〻れ女子の智をりて。鮮ひべきのあらねども。ち人牙の判断いと愛さ〻。夫婦は一體分身とらのくさのあるるべやされば崩れ〻佛像。全くあるべせのくと。正夢ふて。吉祥なるべ。もしあれども。穆ゆれ男乃

癖に。且くあはせるなるべ。よくよちん花のいで来もせん。契りてこの偽なるべは。識を遺〻るべくとのくを偽二郎聞あへざる疑ひは人よるべ。生涯妻なく。子なくて。るとも。ち人牙を忘れて戯れも。他〻女子をとんかくんやさびんなる疑ひなるべ。千枚の誓紙と贈るとも。厭ふべきよあくれども。既なるべ山鶏の片鞘は。ち人牙が護符嚢よあり。ち人牙が渦水の餓鬼は。コレが腋刀の鞘よもるる。刀は男子の魂に。護符を身をするの神に。百枚千枚の誓紙とのくとも。この両種よまんなのあくんやられ。仏女子よあるべ双とりて辟ゆまんち人牙ゆこ彩よ秋風さび。守護の神は踢殺されん。神通起請と誓ふるん。阿磔はこれよ胸ひらけて。膚は著る護符嚢を引出〻て推投き。現山鶏の鞘あんべけくとをち人牙とるて。恋〻れをるく。慰め仕んものら

かくよ頭を。歌さへあんべとのひつも。包紙を披きそんるふ。彼虫の糞の歌は失て。舊の白紙あり。けまべこいっふ。とぞろに。且驚き。且怪しさふ。疑惑して。忙然ろう。偽二郎もこの紙。と怪しとはやへども。阿礫を励さん為よ些も屈せど。莞爾とうち笑筆をとりて書る物の。消も失るべ怪とせん。虫の糞ホーて。ものづらふ。文字をすくるのるふ。日ろ歴されば滅ざるんやとろ。ゆかけるひそ。彼歌はこれ記臆ろう。書つけくるあるせんとりよ阿礫は疑ひ解て。岩齬棚の辺る。硯箱をとりもろーつ。墨揚流してさーよとれべその間よ偽二郎は包紙を推延て。硯よむひ。筆を染め。蔽衣又莫綴。染著欲相縁臨水不可濯。遭砥初究研。山とりのもろうあり。けんくもさころ邪。溺るさべよ水かぐーて。為人書と落疑せ。偽二郎の偽と分てる。

詩文は点を加。且傍訓して。ものゞ意をとりて和解せるふ。詳よ元示。定義の詩と。ひ歌とのひつれとゆんすとふくも契る。前象るべきものるれべ。今又その詩と字添たり。努秘ーるへと。密語は。阿礫はいと欲しげふ。そりてちぐく讀諳ドて。護符囊へ納めけり。抄秋るれば日の短くて。且くふのるふ時も稼りつ。偽二郎は外をうんかへりて。縁頰の紙障よ。入王く日影の落るれべけふも早未は過ろう。今はもあれあるーの選べいふーて脱るべき。よりやは且く別るとも。後あひかーとつふまあるべ。あんず術よりこーらへて。えやくと戒辞ー去る。（不覚よ物をろくとて。氣色ホ悟れあひてさへとて。恥て立んとするや。遽ーく引とる。案内の状の著ろとそけは必といふもあるべ。尚ひ漏せーるもあろ。るどてやさまで急ーるふ心つよ。と怨をしぞ。

いかゞ。されも亦いと惜き名残へ盡ぬ恨あんとも。寸善尺魔。由断へ大敵胃うち騒げば。尻もちあねぞ。やくとも退きて。吉左右を待んとぞおもふくよ後ぞけれ。朝夕へ日ふ寒して。露冷くふ膚寒く。今宵よろ〳〵とひとうねる。この夜を山鶏の。尾上隔てゝよ暁さん。隨意るゝぬ浮世よこそ。憶胃痛や。と掻拭て。うち甘折つ道を起し。匙ゑも二の月未の。好意を謝し。別を告立深やふうち被ぎそ。背門より潜び出るゑん。阿磔へ終よどめかゝて。涙へ雨とふり沃ぐまぐ。匙共侶よ目送まば。偽三郎も亦幾遍狩へ目送る愛惜の影よ立つ横日刺十字街の家よ隔られて。省々ゑんえどなりふけり。嗚乎是怎生なる狂態ぞ。不義とろ〳〵不義よ飽ぬ情慾のあるかとるさよ。愚癡よ凝てへ刃も病〳〵紀や。

阿磔へそゞぎ〳〵伏沈て。絶るだろうたうち歎く。匙へ背を叩撫つ。藥を勧つ勤ゑとさまくよ慰まば。やくふ頭を撞て。推拭ふ袖よ涙を飲め。現れるゝぶ不覚ろ紀。今ゑも家へ公の還りゆゝぶ。泣貝ゑとれて疑ゑん帰京の儲も些ゝろ用意をせんと思へど。吾倩へ左右よ懶くて。指揮するゝよ心をさまぐ。かゝる時杣木挽坊ゑる。刀自を備ぶへ事ゆゝぶ。そゝるゝ彼紀へ。そゆれて云と由を告て。宿よ在さば俱して来よ。とゝそゞせば。匙へ褌解捨て母の宿所へ走去ゝり。阿磔へそとゝゑん廻して。匙ゝ納め送しゝる。盃銚子を推隠し。ゝちゝぜしりの片よせて。箒とる手も力ゝゞふ塵掃清る折しもあれ。外面よ鈴の音して。小荷駄牽入ゝ。長唐櫃と。卑居る物の音よ。阿磔へ待ぬ人のえや。還ゝよけんと。帳を捨て。端

近く出て人と。寓八こそ西國より。自今かへりぬると高ちふ者告りけり。面貌の日黒き。衣裳脚絆よ蹴揚の泥の。乾張著て塵埃深き。長途の疲労を物ども。鞍の駄荷を運入まさ。馬奴人夫ホと労ふてそゞろふ出ーりつ。草鞋解捨母屋よ上りて。阿磔ぶやとふ跪坐を。苟ゞ〳〵六月以来ちん冥よ恙もわ〳〵せのへで。欽びとまよ。ちで著せりひぬ。僕ハ駄荷どもの。宰領して先へいれて。そ〳〵このよを告よ〳〵と宜むるよ。憩もゆせど。歩のそゞーて還ろう。先生ハ六波羅殿へ。ぬん礼をまうーして。こそ。帰宅とべけと。宜ひつまべ。やくも黄昏時よそるゞん。心ちづかー待セ。わ〳〵といへば阿磔ハ微笑ゞ。長き旅宿よ恙もるゞ。家公のかゞせのへと聞とへ。

のと欲ーゞ力づたろう。和殿もさそる疲労けん。案内の状のけん著られべ。些の儲を。ぬんとかりへど。早のるゞ。人手ふまー。異社の姨を傭んとて。匙を杣木挽坊へ走ゞ。たまべ。ぢぐ洗足の湯も温ぢ。ぬも便るれるゞこそ。このひろみて立んとられべ。嘗を穀と引。そぶる。喃阿磔さよ。去歳の冬ゞろうらひそめて。いひふぐやと胸よ。のゞ。熊ま。てもゆる果さべ。第一ハ權よ壓ま。心怯まて便なけれべ。ひろり胸を焦ー。のゞ。第二ハ匙と豆藏が。睡眼わり。鼻鼻あまべ。曖氣まゆる出されど。此度の。苗守ふ残さんるべとゞひーハそゞたのめま。先生そゞふ如才ゆ。苗ぢ丈牡猫も置ま行べ。顔ゞるまもゆるべーて。別まぢ日数ハ七十五日。ぬらが爲丈ハ初物ゞ。折よく四下よ人ぢゞ生延さーてゆひね。と口説も果ど目を細くゞて。抱著んとる

處を天窓を破と打驚して。怯む所突退け。声をあり立ての無禮こ。醉狂狩
吾倅ハこの亜妻のく孫ど。家の子任用されて。内外の守をするの紙。日南
臭く染垂ト。和殿なこどで不義せんや。戯も事あぞとる。以後を倍と慎ざへ。その
なびへ家公ま告ん吾倅を恨きあるこ。こゑひの外ないひ懲されても此ハも騒ど冷笑ひ
原来ハもん多ハ情由もあく。あるじの衣領ま附ま弦原こ家の富饒ふあり〜ハ。
鎌倉ホ不和の兄あり。その嶋影屋湯治と呼ま。一時豪家ありとぞ。さそその
兄貴ハ崇さよりて。狂乱して經死ま。送るハ疑の財のこ承嗣べき子どもなし。
不和あるまど承るれば。指も濡さん数百の金を流ま入セ主人の来歴究く
秘密のるるんば。もん多ハいるぞ知ハ。原ま〜ぞうろき金るれば。久後いづ〜あるべきと

紀の藤白の人いへうさんが貨ハ輪有ゝる影もなれ僕でもさぞうり乃運
ゝゝゝゝやハ襲さるひね物撥攫めく。共侶ハ東國へ走ゝんやよ喃々と口說
よゝて又寅縁んとまる折ゝゝ人の来る音ーてけとべ駭忙てゑかへる間ハ阿磔ハ
奥へ外ーてゝゝ。蜜ハハ偶然の便宜ハ事の成ざんば腹立ーげハ嗟さゝ。途ざぞあるを
迎んとて。草鞋を穿て出る程ハ。匙が異社を伴ゝて。杣木挽坊よりかへるハ遭ね當下
此彼門辺ハ立て恙なれを祝ー祝され躭て内外へ別まけゝ。さんば異社ハこの月来ざく
留守を訪ひーゝど匙ハ親ハ田断ぜどそ。その来る影を見る毎ハ。ちく偽二郎を隠せー
ゝば。異社ハ件の密事を語ゝば。稍肌寒くゝる隨ハ。鮮洗衣ハ暇ゝくてこの月ハ
訪ざゝーふ。ゝるーの帰京のよ沢ゝて。躭て匙とともに来つ。阿磔ハ對面ーく賀を

述。又その上ゝを語て。匙共侶ハ火を焼水を汲入まて。庖厨の夏を資ゝる程ハ。
阿磔ハ嚮ハ密ハがゝれハ調戯ー問どかゝうよ。ゝち驚けども色ハ出さず。
そゝぶゝ奥ハ退きて。心ハよく樂まゝ。つゝゝとゝゝ。ちひさやこのあるじハ。
ゝゝ鎌倉ハ在ゝーとゝ。苟且ハ夫ふせー。湯治ゝ身ゝゝんとゝそを今まゝも知
ざゝーハ中ゝ語ゝゝーゝ兄同胞ゝれば生る日迄ハ音耗せど。況その兄身ゝゝくハ。
噂ゝもせざるふよれゝ。人柔かるよいゝるんば。ゝゝ名咬ゝも快らぬ湯治ゝ屋の家ー
来て。側室ハあゝふけん然ゝゝも既ハ偽二郎ぬーと。契初ハ疎ーゝハ。今又宛家乃
分ゝと。中ゝてハいゝゝゝ堪ゝるべきとハゝ。ゝゝども彼人とハいまゝ諜合さねば。逃隠るべき
蔭もみーー速ゝゝば絆を為損ぜん。矛を任せども心を任せゝ。忍ゝゝ。ゝも堪忍びて。日を

累年月も立ぬ。その間あ彼人ゑ告て智を借り。由断を窺ひ脱る術のゐらぬ
やうとゐひかへよう。悪業の報酬ゑ煩悩の。胸の火焔の火車もて。心の鬼ハ
かゝゑ冥土の迎近つゐぬ。とゐ悟らねぞ無憍ゐ。かくてその黄昏ゑ。劇齋ハ
密ハホ鞍の従者ゑ送ゑて。富小路の宿所ゑかへゐう。六波羅より隷人ホハ
皆そぶ侭ゑ辞し去りぬ。日ごろハ疎ゑ四都の人も。帰寧の祝義ゑ詣来るのも
少かゝ。阿磔ハ准備の盃と。劇齋ゑ勧め。憂を隠してゐ奥ゑ。家内熱開しく
燈火の花も数ゑて。蕭然ゐうー留守の宿。きのふぞあ似ざりゐされば劇齋が
療治効験の。自負物ゐうゐへべゑゑ。西國の名所舊迹或ハ道中の異聞珍説ゑ
衆皆奥を催を程ゑ長き秋の夜更闌ゐうば異社ハものが宿所へ退りつ。あゞも

客のてらして。躯て臥房ゑ入りホけり。人ホ石ゑあゞれば。轎子ゑ舁ぞあいて
長途ゑ疲労ゐうけん。劇齋ハその詰朝己の比及ゑ起出て遽しく漱を。鬚ー
櫛の歯ゑ入ゑて。ひそり便室の縁頰ゑ蒲席を布走ゑー。ゐ宿ゐゐら珍ーき
庭の松を眺めつ。とゐともうち仰げば。承塵ゑ一嚢の薬歯磨あり。楊枝を貫
きて。板隙ゑ排ゐう。三六評ーと身を起ーて。竊ゑ取て一ゑ咬ゐるゑ朝毎ゑ用ゐる
あゆ。薬砂ハ柔くもあゞ。嚢口ハ堅ゑ汚ゑ。楊枝の房ハ表乾きて。裡ハゐ湿
氣あり。かれば。ゑ人ありてさのふぞゑの楊枝を用ひゐる疑べかゞ。もべて
歯を染ゐる女子が。この歯磨を用ん。縦楊枝を用ゐとも。その房ゑ男女乃
差あり。ハ男楊枝ホて。紅ゐも染ゐば。鉄漿ゐも汚ゑ。原来ゐゐ旅行セー

間隙よ大膽不敵の癖者あり。こゝよ夜ハ臥一日を累ねどハ。誰ゝ亦こゝを送さん。曩よ都を起しとゝ旦藏ハ故郷へ遣りつ。密ハ又ぶ持て遣つ。留守ハ僕僮のゝ子ゝそ。おゝくよ後安けよと思惟ハ又れゝ。ぐらゝ只前門よ虎を禦ぎて。後門より狼の入るべき知らざれ。鄙語ふいゝ。守隊の隙ハあんども偷児の隙ハ一とこのゝならん。ようや人を欺くとも。人よ欺るハ男子まあぶ。さる況今暴ゝよ。奸夫を穿鑿せば暗き恥を明くるゝ。これ亦這奴を欺きゝ。ゝひの隨よ罰をあぶ。何をゝてこの熱腸を冷ん。噫嘻娼。腹たゝ。ゝふとべきと手を叉て。疾視逼ゝる怒の面色焼ぐ如き胸の火の。燄とゝて吻く息を。推鎮めて此も騰ぐど。又其揚枝歯磨を。舊乃承塵よ狹ゝそ。膝を抱ゝつゝ氣ゝく。再び庭を眺てゝゝ。浩處よ。阿磔ハ既よ

起出ゝる。主人よ茶を勧んとゝく。手つゝゝ一碗汲めて来ゝば。劇齋ゝを右ゝん受て。立んとゝるを呼ぶめ。自然頃日留守の宿よ起臥せ一人ありや。と問れて。發とりゝ出る秋の色成顔の温熱を。ゝんせゝと莞爾とゝ咲ゝ。こハゝひゝけも留守ゝ。女子ゝゝの留守ゝれば。郷き人ゝ憚けん。言訪ゝてハ稀ゝよ。誰来て起臥ゝ。ゝんやとゝゝもめゝど冷笑ひ。仇ある野鷄の牝恋よ頭ハ隠せど尾を隠さぬ。彼を凡よ。男子の揚枝歯磨ゝ。彼ハゝゝ。と指せば。阿磔ハゝゝゝゝ騒ぐ。胸を鎮ゝ

ゝ。偽二郎ゝの物とてハ送ゝ。帰宅の報よ慌ゝゝ。おの揚枝歯磨を。彼人もゝゝ忘ゝ。吾侠も心つゝゝて。疑ゝゝ悔ゝけれ。遮莫いひゝて。脱ゝゝの紙。ゝ尋思ゝつゝゝゝ喩ゝゝゝ笑ひ。彼二種のゝゝゝ。

疑ひなき人のうへ侍らむ。曩になん夫が筑紫へとて首途の日の夕ぐれに。こゝらを
妾が掃きし。箒の頭にかゝるを。匙がよく認り侍りて。そは旦藏が歯磨
ありといへば。そが侭掃も遣らざりしが。いかにしてか紛れ来にけん。然らばそをさ
取あげよと。旦藏が還れる日。ひそかにさせよかしと箒をとゞめて匙に取せ侍りにき。
原来その折承塵の板隙へ狭まりたるにこそ。といひ黒まば頭をうち掉りて
すべたるすぢもなくさめしかど。匙が身長で彼ればぞ。いかにして手の届くべき。そなさ
なりとも及びがたけん。取られば立て取て見よと詰られても身届せばぞへその折。
縁頬に。踏継の櫓あり。疑しくは匙を召ん問せ給へと。陳ずれば。劇齋呵々と冷
笑ひ口さかしげにいひとけども。匙に問はまでもあらば旦藏が物と知りつ。弟子

局へゆきてありしかば。便室の縁頬に置のまゝなれば。身長も届ぬ承塵の板隙へ踏
継をして挿よしやらんや。よしあるまじき理なれども猶ありとせば。あるにもせよ。
楊枝の房へ表乾きて。裡にある湿氣あり。きのふまで朝毎に用ひざる
ならんや。論より證拠よく見よと遽しく身を起して。件の楊枝を抜
とりつ。眼前へ突つくる紙ぞんかへりもせで酸鼻き。楊枝の房の湿りしは。
いぬる日の雨風に。湿吹のかゝる餘波ならん。濡ぎぬ妾を責んより。匙に
問ねへしらるそやらず秋三月。言訪ふ人もなき宿をかるは苦しき雨の夜も風乃
便を待不楽で寝られぬ隨にはかし。いで恋しく慕しく。僂つ。又僂へて数む
日と共に指に癖はらくと物ありて還らせ給ひて只一夜慰めませ 礒乃鳥らくそ

ある人の説教理なるよ稜立く。疑さんハ心あどそも枉津日の祟欤と怨言つゝ泣く折ゝ人の来る音てけまべ。阿磔ハ顔ま両袖を。推當て衝と立ゝ。次の間へ退く程ま。劇齋。誰とゝかまべ。是則蜜ハこゝほとり近く跪居た六波羅殿よりもん使来まり。徴状あやとさー出せべ。劇齋貌を改めて。恭く受取つ。披見てうち点頭現こまハ徴状こゝりまま此度の恩賞を。行まんとてゐるべ。とく徒者の準備せよ。汝が外ま両三人速ま備へゝ。そゝくとらそゞー立て。承書を写オ。ゝゝこまを使ま遣与て。その人かゝ去ると安ぞ。早飯をらそゞて。衣裳を脱更るどまる程ま。備人水の来まけまべ。蜜ハとも併将て六波羅へぞ赴きけ。かゝれが阿磔ハこの朝辛く龍潭を渡る。心地ハまれどなほ安かゝね胸ま岐道ゝゝく乾と。その偽の袖の両を飲めてあゞを出ー遣つ。初て吻と息まれべ匙も亦その折ま次の間ゐる。あゞの臥蓐を畳納めゝゝけまべ。徒の趣を窃聞て。共ま胸をぞ冷ーゝる。今又曲ま時を沼て此彼額をつ合ーいと危き彼六波羅のもん使まよりて脱まゝひー放ーまま限あけまど又ゝの後へいゝゐれべき再びあゞゞ問まやせん用意をまゝゝゝどへ。そのたびハむゝゝーかゝべーあるゐそゝゝと。舌を掉ふて具けべ。阿磔ハまゞく領ゝそゝそゝる彼頼むのゝゝむゝゝま間ゝとも曩ま吾俤がいひつる如く。口を吏ーてのひ祇と他なく訪れて些ま擬議せどそゝ仏ゝゐ安かるべ。苛ま呵責まあ〳〵べとそゝゝゝづま情を被さるゐゝ恵を仇ま比ど。さゞまと今香旦藏が。立かゝりて問まるべ。彼楊枝歯磨ハゝゝりのゐゝ

ごと必いのん。そも亦難義ゑ侍ぶどや。ろひ過ーのせうそとのふを阿磔ハ笑あーど。旦藏ハ何ともいへ。吾倚とそるゑのロごまあハぶ。そハその折ゑ術あゑん氣色ゑ曉らんなゑ。とそ沼ゑさゑ長さの。橋の下逝く濁水深くも諜合ーけ。かくてその日も午過て。劇齋ハ賜を。從者ホゑ扛擔ーて六波羅よりかへゑ来つ。今朝乃氣色ゑ引ゑ。満面ゑ笑を含。躾て阿磔を召よーて此度筑紫の探題を。療治去ゑ。ー恩賞ゑ又六波羅殿よりも。沙金二百両卷結五十匹綿二百屯を賜ゑなゑ。を告て蜜ハーて土藏の鎖を披ゑー。旅荷物と共ゑ運び納さー。ゑどとゑ。秋の日ゑ。ゑ暮ぬ。そその次の日も劇齋ハ生平のごくてそのふのゑ紙問ざれども。機嫌ゑ程底氣味ゑゑくて。胸ちつゑね匙ハさゑ。阿磔ハ事イ

遅ーゑ主人の心を測ゑ移て。とふかくゑ安かぶ。かくて劇齋ハそのふのゑん礼をさんとて又六波羅へ参ゑ。ゑけども。阿磔ハ留守の便宜を沼ゑ。匙を蓮華院へ遣ーて。偽三郎ゑ云云とまぶ。せゑ〜〜ゑ。ゑへども。こゑも容易の事ゑゑねバ。帰宅の時刻を揃ゑ移ゑ。ゑひみぶゑゑ沼果さぶ。ゑくゑる程ゑ。劇齋ハ還ゑけりこの日浴盧を焼せーぶ。あぶーまぶ浴て阿磔が浴る比ハ。ゑ黄昏ちゑくゑゑね。是ゑゑ先蜜ハゑハ西國の土産齋ーて。六波羅隷ゑる左右士甲乙許遣ーゑ。その間ゑ劇齋ハ匙を便室へ招きゑーて。面を和げ声を潜め。ゑれ今汝ゑ問ふゑのあゑ。ゑぶ家偽者留守の程阿磔ハ奸夫を引入ゑて。筏夜ゑ明ーゑ。せゑーあゑ。一毫も慝ゑ告よ。さゑバ汝を賞せんぞ。とのハゑて匙ハゑち駭ぐ。胸を鎮め頭を

擡こゝにひみもの彼人ざまにいろふて。後暗きの佞んや。とゝへども果ぞ
然るあらば。汝の母偽り隠さば。これ決して許さるまじ。又詳に首伏せば。汝が口より
聞くとゝへで。科よく計らるべし。のぶぞやと。告よと問逼るまて。酸鼻
いとぞ向のみとも。ゐたらねるの状何とゝへべき。許さもの〳〵と逡巡して退出
るまゝ。劇齋怒る眼を反して。をれ耦賊贍太。逃るとて逃さんやと敦圉
暴く揆臂を伸して。匙が衿上搔攫み。膝のもとゝへ引著て。明晃々る短刀を。
閃くと拔て眼前へ晃らさつけて。高声揚べ息根止んかくてもあの母あるゝとゝの欲
告ぞへ目今汝を殺して。後に阿磔を結果ん。明々地に首伏せば。汝はさゝ〳〵阿磔が
うへも。穩便にせんをぞあり。心を定めて返答せよゝあぞやと責威されて。匙は生る

終に欺きゐたりさとゝちりふ心の浅ちりふ。母疑ひを釋んとて。媚て
枕を進まべ。劇齋いとをゝしくて。あの老孤虚々とゝれ汝に欺まんや。
ゝれこそ汝を欺きゐられ。釣る〳〵罠をあぶざるやとゝの中にゝるゝ隠して刃を
研ぐべ。とゝくさる程に秋暮て。初冬の上澣にありね。有一日劇齋へ蜜八を招て
彼此ある。病架へ赴さーかへるさに蓮華院へ立ゝて齎せ捨物を方丈へ寄進
しつ。前月帰京のより紙告ゝべ。住持へ對面して茶をさゝめ。その恙なを祝して且く
道俗の雑談を。當下劇齋がのゝまう。某前般六波羅殿の仰を禀て。西國に
走下り探題に湯剤を進ぜ〳〵小十死一生なるゝん病著日ゝゝ癒りのゝまゝ。
ゝん欣び甚〳〵厚禄をゝて通ん。頻に仰られ〳〵ども某の母大望あんぞ。

西藩の醫官たくんるに願ハど。推く辞ーまうせーるが。惜せるるの大くさるらべ。もうらべ汝が弟子ことも。まあるせよ。弟子よその人るくハ親類あれ縁者ゆん。醫師るくぞも厭ふとみー。汝が萬るのなるらべ。俸禄形のどく宛行ん汝よりて再生さるるらべ志よこそ。あまをーもな身推辞ゆと宣むるとの辱さよ某が弟子よ。おん役よ立べきもの。おど二人ゐいつど。親族縁者の子弟を擇ぶて。ゆ上べくゐと。承ありて退くあれ然けれども知るるどく。都あハ縁者もみー。舊里あハ親族あれども。皆是田夫野人ゐいつどう筑紫の探題の近臣よ萬むべきこの一條あハ困ーー果ーう。聖僧よ對ーまりゃいかるる俗談をつまるハ。潟許の所行るべけよども。諸檀方の中あどよ心あくハゐハ

心地する。兎さもあれ、實を告んと、且その刃を退けて、と、声ハ只枯野の虫の霜よ
吻くごとく、劇齋へさもこそと、刃を左手に取直して、そゞ俄に引起れば、匙を
面の黒ずみるも、忽地に青くなりつゝ、涙に白粉剥く、青黒に濃と薄あり、粉
桶に陷る、溷鼠に異ならず、啜あげくて、やうやくに涙を歛め、有繋命のいと
惜さに、阿磔ぐるみの一五一十七月十日の欲参よりも蓮華院へ、偽三郎が
単衣を、引破り、絆の首より、一昨日帰寧の報あり、ふと、偽三郎ハ慌〳〵く、
蓮華院へかゝり去り、尾まで、送るく其報〳〵、劇齋聞て、刃を納めさぞあゝん、
さもあるべし、初の艶簡ハ、燔さうとも、別に又偽三郎が、阿磔に贈れ物ありたやと
問まて、要時沈吟し、彼人こゝに在り、程、物贈られるハ、俄に、別に偏て何ぞん、

書つけて、遮ぎられを、護身嚢に納めひきそも外ぐらるゝさるの、情
由ハ、沼ぎ、ぞ、ゝ、といへば、劇齋、頷きそさぞあゝんさもあるべし、阿磔ハ
今浴盤に入るぬ、是究竟の折にこそ、汝、竊に彼処に、忍て、護身嚢を
りて来て見せよ、とのそぶり、立るに、匙ハ今さら、推辞に、曲なく、阿磔が、脱
る衣と共に、衣桁に、掛し、護身嚢を、竊取て来にければ、劇齋、ものゝ
紙解披きて、此欲彼欲、とゝる程に、果して、詩歌を書し、物あり、為人と、落歎して、
紫金の、山鶏の、皮鞘を、包添へ、こゝに、欲と、問へ、然と、答へ、劇齋、あべく、黙讀
して、舊のごとく、嚢に、納め、こゝを、阿磔に、知さぬ、舊処へ、掛て、措、ある、要あるぞ、
又来ると、長けば、こゝを、沼て、浴室のかゝへ、入かゝり、来て、跪坐を、彼一槽ハ、仰る

隨ふ。舊の衣桁ふ掛けり。御折檻のかそうーさまの（ぢだらの）紙さくーき。顧ふ妾が咎ハ
さくーと。彼人ざまのうー（ーも）免さをのつぐ幸ふくんとい（ひつ）袖りて目を拭へバ。劇齋ハ
冷笑ひそハもかくも。ひぶ意ふあり。證拠を取らで彼嚢を返せーふも察せよりー。
さぐん彼偽二郎を。竊ふ人ぐやとふくるり。案内者のるのれべ今汝を將て彼処へ
もうんぞるくへ来よと腋刀を腰ふ帯。先ふ立て。庭門より出るるん。匙ハ胸ふ母
うち騒ぎそいふく難義ふ（ーども）。緯既ふ破ぎてハ勢ひ脱るべくもあらぐ阿容
阿容と主の後ふ。従ふてあく程ふ。蓮華院のかハ（ハ）あらで。東を望て赴くあぞ。
匙ハいと訝ーさふ走らつ袂を引て。ハ何処へ遭せのふと問バ劇齋ふ（ふ）りて。
ふれ、のうら処分あり。只ひぶ後ふ跟て来よとふふよくーとろを伺ど既ふーて

鴨河ふ。假橋を渡る程ふ劇齋ハ左手ふ。河水を見て立駐り。匙よ。彼処ふ
光る物あり。何あるあんと指をかふ示。ふんとて傍ふ立る処を。劇齋ふ。足を飛て。
匙が弱腰。磯と蹴る蹴られて叫ぶ声と共ふ真倒ふ蹴落されて。愛と立る水けふの。
底ふ沈て且くふえぞとの時。日ハ没果て。天結陰ふりけるバ望月の影ふ母空ーく。
水中黒ふて水音高ーいふる比の秋雨ふ山その水漲落ふく。瀬を越る浪の急けるバ。匙ハ
推流されるるべ。折ふら東のかさふりて。橋を渡来る人あり。劇齋ふ紙ふふりて。
足ちやふ引かーふ。嚮ふ出ぬ庭門より。竊ふ便室ふ入る程ふ。阿傑ハやふく浴室を
出け。渠が浴の久ーれを。劇齋豫て知られぬその間ふとそ。ぜ支るべ。

第八套　伎倆の屨價　因果の車井

浩処は蜜八は六波羅よりかへり来つゝいと暗く咳くを劇齋はメて声とゝり立日の暮るゝゝ。あどて斯灯を揭ねどと呼まべ。阿礫はいそ〳〵衣を被て蜜八が焼〳〵る。行燈を奥より居て。匙よくと敎声〳〵呼べども絶て応ぜず。渠厠へや登りけん。浄手は久〳〵癖あれば。吾倘が背の垢も流さぬ。日の暮るゝもあるまじ。とひとゝごろの出て来ねば。主人の機嫌を損せ〳〵とく。蜜八は柴折焼〳〵。夜食の膳を果ても。匙は〳〵影もせず。ちひかゝつて便室よいあれて。云云と告るよるん。劇齋ゝて冷笑ひ。這奴生ごろつゝたれば。旅行の留守の程よりゝ密夫のどよあひ初て。動さんば曛昏よ。小路隠をするあやゝんのづゝるで来るまじ。うち捨まして懲〳〵へ外を索るとゝいまて阿礫はとまも亦ぶうゝあるれ

欲と忘べいとぐ安ゝね。胸苦〳〵さよ再びいんぎ。ちくさる程よ夜は〳〵や二更よりよけまべ。劇齋は阿礫を召て。匙ぶ今ゝで出て来ねば。ぶ推量よ違ふとゝのく。密夫よ誘引て。逐電せ〳〵ものゝべ。さがれ今宵は更闌ゝ。翌は早旦蜜八を。異杜許遣て。佶と穿鑿せべきゝ。門の鎖をよくさ〳〵ねゝ。といふ言の葉よ稜るけど。瘡のゝ足の落つゝね。阿礫は通宵物とゝひぬ。かくてその詰旦蜜八は主人の意を。ひゝて。杣木挽坊へ赴きゝ。異杜よ匙ぶゝの紙告て。倘そゝとゝやゝると問べ。異杜ゝ。うち駭きゝく。渠ゝ手てゝゝよ来ゝゝん。そは安かゝねゝふとゝとゝいふゝいふくうちも措まゝど。躰て異杜をいそゝ。富小路へ将て来よけり。當下劇齋は異杜を奥へ召入まて。匙がゝのはゝゝと。説ゝゝると又一遍さそいふゝ。這奴は年いと少けれゝ。

人をうしなる役人立ねど。月来阿磯が心長閑く。使ひうの人みな知て然るを
為足ぶとせ。欲主の隷ど。親も附るど。女子よ似げるく。逐電せしの良ら敢
情由のあくてやへそへそれかくもあれ國ゐ國の法度あり。家ゐ家の則あり。
そのことを憎しとゐねども。こゐ忽よるゐぬるこけ。とりして三日の間よ往方を索て
将て来よ。等閑よせば。婆々も罪あり。そのゑびゐ決して許さず。公聽沙汰よ及ぶ
と。後悔せるとぬ。一つ懲一つ。敦圉暴くとゐ示せば。異杜ゐあん理ふそ。只あん
慈悲をとだうふ。諸て宿所へ退ろう。この時阿磯ゐ胸るしさよ奥へ避く
異杜よ遭ど。どうへもう危きよ。人を憐む暇ゐ。憐ゐ渠を慰めば。疑まんとあらべ
ろう。かくてその日ゐ暮しくば。異杜ゐ名草の宿所よ来て。匙が往方を彼此と。隈

なく渉猟けれども。今ゐその便宜を得ど。ゐけこのうへまゐん慈悲りそ。又四五日と
いひ延るよ。劇齋ゐ出てもあんど。約束の日を過しても。許とべきるゐらねども。阿磯が
由縁のあれば。渠よ顧て五日緩ん。偖と索て将て来よ。と蜜ゐよいとるよ異杜ゐ
躰てかへろ去りつ。その日よるんば又五日。或ゐ七日といひ延て。来る日もあるば願事よ。
歩を運びく日を送りぬ。是よりゐ先よ劇齋ゐ匙が俄頃よをりてゐ。厨の
夏よ便りとて坊後の裏屋よ。老夫婦を傭ひつ。日毎よこれ使ろ。阿磯が
私情を防ん為。これがこの老夫婦ゐ早ろ暮るくば。薪水の夏を掌りく。
夜ゐ宿所へ退るゐん。蜜ゐ再び阿磯よ口説ようん。とゐへども
彼傭人ゐよ。恋の関を居らんて。終よその便を得ど。おろそ焦る心ゐ。阿磯ゐ

又偽二郎ぐの孫のそゝへども。既よ匙がせゞるゝてへいよ音耗をべくもあゝべ。彼女子ハこの月来密夫あゝべきりの夫わゝべ。仇ある恋をせゞゝるゝ。豫てよゝゝこれよゝ知まて。然ふ故ゐゝ逐電せーハ彼楊枝のゝゝ再び起て。手奇怪呵責よあひもせべ。共よ罪を沼脱まゞ。と思ひおそれて逃隠まて欲さゝとそ何處よ身を寄をへき。親の家夫来ゞとのへべ。少女こゝゐの坐よ逼ゝく。淵川へ身をや投めけん。去かゝゝん夫いといさう。痛ーたるまこそと想像ゝゝとよかくふ。憂をまゝ穂の繁芒招くともなゝ日を送るよ劇齋ハ竟イ復彼揚枝のゝ孫問ど。夜の衾も隔ゐゝ。初よ変る氣色あゝ彩び阿嬢ハ僅よ胸ちつゝて。原来彼菌磨揚枝を。一旦ハ訝アそ。詰問まてのそふとそ。

ゞゝや。その人かゝゞよ稱ひるべ。某が親族ゐゝとて。探題家へ薦ゐゝさゝ。ゐべき人ハゆいゞゝや。と問ふ底意ゝと深を。伎倆ゐゝとゝゐるゝ。但ゞゞ寺ふ寄宿ゐる。草楽偽二郎と云檀越ハヨヅげまどゐ。目今誰をとゝゐハゐゝ。武士の浪人ゐゝ。渠ハ浪花の人氏よとそ。その手迹甚佳妙。且学問も些ゐゝく。和漢の故實を記臆ゝ。その人かゝゞ賤ーかゝゞ。年ハ三十よ足ゝざるべ。男態風流なまべゝと少くゝゐゐゝかゝ。この人ゝよ寄宿のゝゝ。ゞゞ寺の一切經一部いとく蠹蝕ゝゐ。そを繕写せゞやとゝゝよ。法師ゞゞゝ能書稀ゝ。ゝて今茲四月の比ゝゐ。彼偽二郎を傭ひつ。繕写のゐを委任せーふ。浪花の乾親病著ゐゝとて。七月の中旬ゐゐ。猛よ彼地へ赴きゐゞいゐ。月の十三日。再びゞゞ寺へ来ゐ。去ゝゐれとも貧道ハ。

渠が人とおもへども卒介のことなれば。そが汲引をこそ且試み給ふの宜
かんとおぼしめつ。對面して商量をのべ。ものごころ分明なるんどの外はその人をして
正首をとれ示せば劇齋笑て莞然とうち笑ひ。そハ究竟のなさる。願ハその草樂
生を。對面を許さるべくハ。時宜よろしく立地の綽の整ふをやあるんや。面藏の
ありてこそとのゝ住持の欲びつ。そハいと易きことと応て掌をうち鳴し。一個の行童を
召よせて。云云と命ずれば。こゝろ得果て退きけり。當下劇齋ハ腹裏よりおもふ。
これ偽二郎が姦を去ることを。いかゞその人をんどをして彼奴を認るべ。こゝ謀その
圖は當れり。且彼奴が。乾親の病著を。看るをこゝろへ。浪花へ赴くべく。初
秋の中浣より。いぬる九月十三日をもつて家を潛居る。事實此彼胎合ヒ。甚麽

ある面ぞ。ようこそ。とおもへ氣色を推隠して。扇の要走して。今ようこそ候ひ
偽二郎ハ。おひかけるゝ。住持の賓客より引接をもとて。召るゝこの訴へけるとも。推辭
べくもあらざれば。そこ〳〵袴を引穿て。客壇より来るけるとハ。住持ハ間近く招ひて。
今劇齋をいまこゝに。辞みがく說示して。扨劇齋をうち對ひて。この人則
偽二郎と。引あはせんば。劇齋へ。席を讓り。名字を通じて。他ものなれば
歎待して。其云云の一議あり。遠方ことも厭はとなく。官途を進んとおもふ。
筑紫の探題家へ吹挙せん。去れども。綽一朝ハ決しかたし。再三その意を
ゆるしこそと。真しなるを相譚ひ。偽二郎ハこの来客を。誰なるらんとおもひしを。
その名を呼て。おのれども。顏色の変るをこそ。胸ハ頻にうち騷ぐを。推鎮てつく

ゆくゝよ。俗よいゝ甘ゝ相談くゝがれば阿礫と情由あるゝ。知れるゝあおざるべし。然とて心を緩さんや。といへば有繋ようちも解ぎ。ゆゝ果て頭を擡。薄命浮浪の某を。大諸侯へ薦んと思食つれしゝ。寔ことよるゝ幸ひ。ゝあれども人あるゝ。支度ハ自力ゝ整ぐさゝ。浪花ゝる親族ゝらち相譚て後ゝことをゝん答をつゝあ。好意謝ゝるゝあゝうゝ。といへば劇齋微笑て。現然あるべきゝゝゝ。ゝん。輕諾ハ信寡ゝ。當座ゝ承引ゝハねば。ゝゝ望ゝくゝゝのゝ再て談ぜゝる毎ゝ。上人を労ゝゝるべきゝゝゝあゝ。休息所ハゝどや。と問ゝて偽二郎悪むゝゝゝ。この方丈の西ゝ當りて。籬邑の中ゝる矮屋ハ。是某ゝ臥房ゝれども。搔ゝ拂ハぬ狹席ゝ。未臨ハ恥ゝる堪ゝ。倘又所要ゝゝゝゝゝ。庫裏ゝゝ

召ゝぬゝ。頃日ハ日の短くて。書写ゝ暇の惜けゝ。ゝゝ後の見糸ゝ承るべくゝと回答て更ゝ欣びを。住持ゝ述て退きけゝ。劇齋ことを目送りつゝ。陽ゝハ得意の面色ゝて。その人柄を誉ゝ。住持も亦欣びていひ甲斐ゝと。ゝひゝゝ。かくて劇齋ハ方丈を辞ゝ去りて。本堂のゝとりゝ来つゝゝゝゝゝ。あれゝ。蜜ハをれかゝりて。云云と分付ゝ。蜜ハこゝろを汲て。遽ゝく立かゝ。偽二郎ゝ子舎ゝ赴くゝ。恰好偽二郎ハ。袴を脱て壁ゝ掛。劇齋ゝいれゝゝる。ゝとゝゝゝゝゝゝ折。外面ゝ呼門ゝのあゝ。誰ゝと応て障子を開ゝ。蜜ハ躍て縁頰のゝゝゝゝゝ。進ゝ入て。偽二郎ゝゝゝ對ひ。僕ハけゝ初て。見糸ゝ入ゝゝ。名草劇齋ゝ従者ゝゝ。主人記臆のゝゝかれゝ。

倉卒の間ゆゑ。ゆゑ苗字を忘れたり。無礼なれども問て来よといつけられて来りあれ。といへば偽二郎頷きて。某は草楽氏と。草はくさ。楽はたのしむと。草楽偽二郎でゆと報るを蜜八うちうなづき。僕も亦記臆る。況文字の訓讀をンどハ。一切そろはいぬど。願ハ一筆紙の端へ書つけてもひ行。と代るのるく云まく。且も亦推辞べきなれども机よりひ。毫を渉く。姓名を字一つ。且りてあれねと。遽与まるン。蜜八その間ゆ。縁頼ゆ尻をうけて。室の四隅ゆ究めつ。名簿を受て。うち戴き。そゞ伏走去まろ。劇齋ハ蜜八が。かつ来るをまろ程ゆ。要時こそありけれ。いつまぞ欲途中ゆ立在ゆ堪ざれば。寺門のわとりゆ赴きて。そうれば左辺ゆ門番屋あり。この寺の門番ハ鼻缺

額ゆ古瘡あれば。人とハ云えぬ面影の。剝瘡毒を患る者。頤の膏薬よろ。衣領ゆ流る膿水ハ。ゆゑ臭ゆ臭けく香脱の土間ゆ。桶ゆ菰草を敷排て。窓ゆハ草鞋草履なンどをいてゞもあく。拵出せハ。ものゆ造りて賣こけり。劇齋ハ。ちくと。出ーてゆ。この門番ゆ。道人ハ一癖あるべき面つきゆ。手押置べ後ゆ用るとのあるらゞやハと。忽地ゆ尋思つ。ちろ近く立りて。門番ゆうち対ひ。れハ徒者を候ものゝ。卒尓ゆ。この端を些貸ゆ。と羽織を褰て。柢ゆ尻をかけんとまれば。道人ハ。ちくと云かつく。然るべきものとゆひけん。そハと易れるゝ。衣裳の汚いん。塵ゆ拂ゆ。ちくまゆよとべ。といひも詫らゞ身を起して。蒙笠帽ゆく掃清め。いざとゆさへと。請されべ。劇齋ハ。欣びく。その名を問べ。薬中と答ふ。そのとき

劇齋ハ揖ゝ草履を見廻て。この紙緒の薄草履ハいづれも和上の細工なるべ。いとつよげよえんめんべ。已も一雙買そうて。持草履よとべきこと。とゝのへて四五雙とりもゝ。既よ齋ゝとるゞく。某ゞ造まる草履ハ。藁を打て大ゝるゝゝねべ。第一よ足袋を損せべ。端緒よ真芦を用ゐべゝ。強ゝと人ゝ邦いへゝ。めされゝへとさゝよゝるを。取て傍よ折ゝ。蜜ハかゝて来よけよべ。劇齋ハ目を注て。偽二郎が返辞をいハせゞ。この草履のつよげゝれが目今一双買そうたゝ。二疋のち添よと遞与て。懐を搔探て。又薬中ゝゝ対ひけゝハ中途のゝゝ。鳥目を忘まゝくゝ。とゝ納ゆゝといひ被て。一方銀を取まゝれが薬中ハ呆果て。受ゝゝゝ取ゝ納めゞ。こゝひ分ゝゝ。只一雙の草履の價よこの金受てゝ

らんや。他日糸詣ゝゝ日ゝ暮ゝゝ厭ふゝゝハ決て受ゝゝと推辞ハ劇齋頭をゝゝ掉を。ゝこの草履よ限ゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ来て草履を買せん。ゝゝ姓名を今告ゝゝゝゝ。ゝゝ後ゝものゝゝゝゝゝ。ゝゝ退ゝと立ゝゝゝ薬中ゝゝゝ欺ゝて。蜜ハよゝゝ追従の。藁打槌で掃く庭よ。腰折屈めて送ゝけゝ。ゝゝ中よ蜜ハ。年来客ゝ主よ似げゝ。今一方銀ゝて。草履一双を買ゝゝ。綟のゝゝを見ゝゝ。ゝゝ舌を吐て呆惑ゝて。ゝゝゝと必ひて。主の後方よ従ゝて。ゝゝと既よ一町許。劇齋ゝゝを見かゝて。偽二郎が見ゝゝゝ。ゝ向ハ蜜ハ遽ゝく書ゝ名簿を懐ゝ。ゝ出ゝゝて。且その子舎の為体を巨細よ告ゝゝ

劇齋こゝを労みて、披きその名簿を見るに曩に阿礫が護身嚢に、秘
かを窃見しつ。詩歌とこゝ同筆なり。彼詩歌に落款して、為人と写せしを。
偽二郎の偽を隠せしに。既に阿礫が女婿夫を云つ。子舎の案内さへ知りつ。且此彼の
證拠をなして。彼奴が足を禁るに。栄利をもて誘ぶられば。嚢の物を取るよう易し。
遠ざかる手を下をべーと腹裏にこの。この時は蜜はあもいまぐ意中の機密を
告ぐ。只偽二郎に對面せ。一條のうへさく。聊ようあれば。蓮華院詣のこを。
阿礫ふみ知りぬと。と耳ぐさ示して。さう氣なく。その曛昏に宿所にかへりつ。又
四五日を經る程に。霰ぐ。その甲夜の雲。颯に吹霽て。いと寒き夜なりしば。
彼傭人夫婦のりのは生平よりもやくかう去り。蜜は厨戸棚なる。酒を

盜みて醉臥しつ。劇齋は阿礫と共に臥房に暗火さし入れて。爰中の北おで
いまだ睡らぬに。夜の更る隨寒かるに。鶏卵酒してあてがはんとて。火を起しぬへ
し。とくといそぐに。阿礫は火鉢に續ぐ炭を。半起して。紙燭して。躰て厨に
赴きつ。物大かるまでに。摘て烱鍋をうけ。鶏卵を摧き。その酒既に熟るふ。
小杓子を忘れてうば。再び厨へ走きけり。その間に劇齋はひとり竊に准備
せ。蒙汗薬をとり出して。鍋中おぞ入れてうける。阿礫はいうでろおれをもる
べき。とくくして厨よりは杓子を索出して。来て躰て盞に鶏卵酒をうつ
つ。はづ劇齋に勧めば。劇齋はその盞を手に取んとして。膝打鳴して。憶忘れる
ものをおれ。翌は祖父の亡日なりしこの酒を喫くして。そなさひとり竭しぬへ。

生酒も欲得と云へども。更剛えんべ者なり。臥てそなさる酒氣あくべつ多も
共よあてきりんぺく喫のへとさーようをさう。阿磔ハとをを実亨とーて。理あんべ
沼も浮ぢとその盞を受いぶれて。吹冷ーつ喫ゐどよ又一盞と勧めくとく。
うちかさねとうけまども。鍋ある酒ハ半も盡ぢ。獨酌ハ與ゐ沈よさ生でそ
そ物とう片よをそぶおてよ火を埋めつ。共よ睡よ就んとるるよ立足取次よ得も
堪ぢ。忽地よ仰反倒て眼を睜り。手足を張て流る延ハ糸の如し。劇齋そ
さもこそと快愉ようんかへうて。裳を褰て頭を踏著。畜生今こそ思ひまるらめ。
留守よ姦夫を引入まて。飽ゐぢをんを欺んと計アーとの愚さよ。偽二郎と
推ゐぶべて。殺さるハ後々ゐぢ。外聞をゐへぶ。汝をまづ結果て後よ彼奴を

殺をべ。細工ハ流ゐ。落成をんよと潜ゐ小罵責て。肌よ著る護符嚢を
奪ゐそぶ項よ攜。密と縁頰ある遺戸を外て。阿磔を肩よ引被て。徐々て
庭よ出まども。阿磔ハ既よ蒙汗藥の毒氣よりて。死せるが如く。絶よ呼吸の
かよふのを。劇齋ハそぶ侭よ庭ある車井よ立よりて。阿磔をやをう扛揚つ。真倒よ
投落せば。軒よ撲ま。水よ溺まて。忽地よ死てけり。かくて又劇齋ゐ。井の辺よ庭
下駄を脱る如く並居て。竊よ臥房よ立かへつ。鶏卵酒を流し捨て。銅盞を舊の
ごく。戸棚へ納めゐどさる程よ丑三の鐘音ともに。弟子局ゐハ。蜜八が。鼾声のを高
ければ。造化高妙とひとう笑て。臥房の燈火吹滅つ。横引被て臥さうけう。憶
劇齋が残忍ある。憎むべく。懼るべき。最根深き伎倆ゐんぐる。阿磔も亦始終罪

因果覿面
一妾
先溺死
阿磯

ゆき
影齋
雲八
雇人
雇人

あり。今その慳吏の手ゑ死せーハ。自業自得とは云ひつべし。物の美あるハ多く毒あり。その害豈少からんや。野花禽獸皆然り。編中の孝子義士節婦の稀なるといふべからず。再説その詰旦傭人ホハんやく来つ。蜜八もとく起つ。便室の遣戸を開く音ゑ。劇齋ハ驚覚て起出んとする程ゑ傭人ハ井幹ゑよりて水を庖湯ゑ汲入るゑ長き黒髪罐ゑかゝりて女子の死骸浮まけり。こハいかゝと驚叫びく。蜜八ゑ告あるゑ報ゑべ主従慌忙つ。齊一度へ走出て熟視ゑべ阿礫ゑ。劇齋ハ慷慨ーゲゑ。脱ゑる下駄をとゑんからんとゑの下駄のとゑまゑんべ。謬ゑて落るゑゑべ。ゑれハ夜飲ゑ醉臥ゑんべハ渠が臥房を脱出ーを。今朝ゑゞもゑゑざゑ死ゑり。野狐ゑ呼出ゑれ欺ゑゑゞ。ハハゑハ狂乱せーゑの欺ゑハハゑゑゑんと蹉跎て陽哭

それべ蜜八もゑゑハをかけて。ゑゞ本意遂ぬ。阿礫が横死をいと惜て。竊ゑ涙を流ーけり。さてあるべきゑあらざれハ。劇齋ハ云ゑ四鄰ゑ告て人を聚合使を杣木挽坊へ遣ーつ。異杜ゑ阿礫が横死を告て。とく来ゑといふゑ異杜ハいゑ驚く物かゑ。匙ゑ議のまゞ果ねべ。影護くゑひけん。病ゑ假托て。遂ゑ来ゞかれべ俟とも甲斐みゑとて。水ゑ汲ゑ飲ゑるゑのーて。阿礫が死骸を引揚ゑるゑ一宵井中ゑ浸れ。花の顔色変りて。腹ゑくゑふ。手足も太ゑり。珊瑚折摧て。水ゑゑ寒ー。おゑ痛ゑくゑと人々嗟嘆ゑゑけり。素ゑゑ横死のゑゑのれべ。劇齋ハ亦蜜八と蓮華院へ走ゑして由を告。法師を招ゑ。縛ゑ紙律ゑ従ゑて。骸を棺ゑ斂ゑる。是も阿礫が愛せーのゑ。彼も迷愛の物ゑとて。衣裳調度櫛笥まで棺ゑ納ゑる物ゑ。

さて次の日は葬式して。棺を擡出さんるぷようづ本妻のどくふきてんべ彼此の人陸續して。寺まで送るもヲタかりけり。抑劇齋が肚裏。自いうある伎倆るらん。量知るめの絶てゐ。かくてその日の下晡より葬のる果て。蜜八へかゑり来つ。傭人ホへ辞して去て。傍より人のゐくなりけるべ。劇齋へ蜜八を奥ちりる処より召さく。閑談時を移して。沙金四五両遮与よるゐん。蜜八こをとうち咲つ。一たびそ驚れてゐくむも嘆息。又ゝとびへ怒を含ミて。眼を睜り。腕を扼り。仰ふけぞりひひね首尾よく為課せゆうんと。応て金を受納め。その胷間より只ひとり。何処へもゐく出去けり。

刀筆青砥石文鵞水箴語巻之四終

97714